

朝鮮学校の二つの仕組みと日本社会

—〈自己完結統一システム〉と〈朝鮮学校コミュニティ〉に注目して—

プール学院大学 中 島 智 子

1. はじめに

電車の窓から学校らしき建物が見えたとき、建物は日本の学校と変わらないが校舎の壁にハンゲルが大きく書かれていて、それが朝鮮学校だとわかったときがあった。今は、校門に書かれた学校名を確かめるまで、そこが朝鮮学校だとはわからない。かつては電車やバスでチマチョゴリの制服を見て、朝鮮学校の生徒だとわかった。今はそのような姿をみることはほとんどない。

朝鮮学校の「姿」は日本社会の日常からかなり影が薄くなっている。こうした現象は、日朝関係等に「問題」が生じたときに、直接関係のない朝鮮学校の児童生徒への暴言や暴力が頻発したためにとられた防御策であり、今日では日常化している。そういう日本社会に居住する住民がたまに朝鮮学校に出会うのは、「高校無償化」や「補助金カット」という文字とセットになった新聞紙上の見出し、ネット上のバッシング的な書き込みに出会うときだ。

このような現象をもってもし朝鮮学校の「閉鎖性」に言及する向きがあるとすれば、それは大きな間違いである。なぜなら今日ほど朝鮮学校が学校の「門」を開いている時代はないからだ。朝鮮学校の中には年間に1～2度公開授業をおこなっていて、保護者だけでなく誰でも学校を見学し授業を参観できるところもある。地域の人も参加できるバザーや納涼会があり、そこでキムチを買うのを楽しみにしている地域の日本人もいるという。また、朝鮮学校を支援する日本人等による会があるところもある。

東京では、朝鮮学校を会場にした〈日朝教育交流のつどい〉が40年近く実施されているという。「まず、お互いに知り合うことから始まる」を合言葉に日本の教職員組合と朝鮮学校の教職員組合が積み重ねてきているものだ。その活動の目的を、

「朝鮮学校では子どもたちが先生を信頼している。教師も子どもも生き生き学んでいる。こういうのを日本の教師が見て、しんどう日本の学校現場でがんばっていける何かが得られるのでは、と思って〈つどい〉をやってきた」と日本人元教師が話されるのを聞いたことがある¹⁾。

また、研究者に対してもオープンになってきている。最近では、日本人の学生や研究者による朝鮮学校研究もみられ、長期的なフィールドワークをおこなっている例もある²⁾。フィールドワークを認めるということは、日常生活をさらすということであり、日本の公立学校等でもどこでも受け入れ可能というわけではない。ところが、さらに驚くべきは、韓国の留学生のフィールドワークを受け入れていることだ(宋2012)。南北が分断されイデオロギー的に対立している両国という見方が日本社会に一般的であることからすれば、信じられないかもしれない。しかし、北海道の朝鮮学校を撮ったドキュメンタリー映画の監督は韓国人であり、その映画は2006年釜山国際映画祭でウンバ賞(最優秀韓国ドキュメンタリー賞)を受賞している。東日本大震災で被災した仙台の朝鮮学校の状況を震災の4日後からカメラを回して撮り続けたのも韓国出身の監督であり、さらに言えば、今日本の朝鮮学校を力強く支援している「モンダンヨンピル」という団体は、韓国人俳優をはじめとする韓国の人たちによって構成されている。

では、何がこのように日本人や韓国人や、つまり朝鮮学校関係者以外の人々を朝鮮学校は惹きつけるのだろうか？その理由は個々に異なっているが、少なくとも「禁断の場所」への覗き見趣味でもなければ、朝鮮学校への差別に対する怒りにもとづくだけでもないであろう。私自身について言えば、そこが単に「外国人学校」や「各種学校」として頻繁に語られることへの違和感、つまりただの〈学校〉である点にある。かつては子どもの

保護者として、最近では学生の教育実習校への巡回先として、学校協議会委員としてなどで訪問の機会が多い日本の公立学校とついつい比べてみて、〈学校〉ということではどこも変わらないという思いの反面、朝鮮学校で感じる独特なアットホームな雰囲気と、その背後にみえる教師や保護者や子どもたちの親密ながらもそれぞれの役割を精一杯に果たしている「がんばり」の風景が、何度も足を運ばせている。ここ2年間で私は、大阪や兵庫、東京、神奈川、宮城、福島の朝鮮学校を10数校訪問する機会をもち、そのうちの1校については1年間の調査をおこなった。

本稿は、こうした私の目にとらえた朝鮮学校の姿を、学校制度の面からは〈自己完結統一システム〉として、学校と地域、家庭の関係という点からは〈朝鮮学校コミュニティ〉の再生産と結節点という側面から描いてみたい。そして、こうした朝鮮学校のあり方が日本社会の何を照らすのか、日本の教育に何を示唆するのかについて考えたい。

2. 〈自己完結統一システム〉としての朝鮮学校

(1) 朝鮮学校の制度・カリキュラム・教育活動

日本にある外国人学校には、インターナショナル・スクールや中華学校、ブラジル人学校など多種多様な学校があり、その数は現在200校程度と推測される³⁾。そのうち朝鮮学校は63校を数えるが、朝鮮学校の特徴は、全国の朝鮮学校が統一されたシステムとして存在することである。

朝鮮学校には、幼稚班・初級学校・中級学校・高級学校・大学校があり、就学前教育から高等教育までをカバーしているのは、他の外国人学校に類をみない。学校の名称が日本の学校と異なっているのは、周知のように1条校ではないために小学校、中学校…という名称を使用できないからであり、朝鮮民主主義人民共和国の学校とは異なっている。また、学校体系も6・3・3・4制という日本のそれを採用している。すべての学校が各種学校として認可されており、都道府県毎に学校法人を有している。教科書は朝鮮学校専用のものが独自に編纂されていて全国共通であり、カリキュラムも共通である。

これを他の外国人学校と比べてみると、例えば

韓国学校は4校あるが、それぞれが系列校でもなく独自に運営され、教科書やカリキュラムも各校が独自に選定、作成している⁴⁾。中華学校も全国に5校あるが、事情は同じである。ブラジル人学校の中には系列校もあるが少数であり、ブラジルのどの教科書を使うかによってカリキュラムも異なってくるという。インターナショナル・スクールの中には近年IBプログラムを取り入れているところが増えているが、かといってカリキュラムや教科書が一元化されているわけではない(以上は大阪大学未来戦略機構第五部門(2013)より)。ついでに日本の公立学校に言及するならば、周知のように学習指導要領という縛りはあるものの、教科書は検定教科書の中から自治体毎に採択されている。

朝鮮学校のカリキュラムは、ほぼ10年毎に改訂されており、教科書もそれに応じて改編されている。10年毎の改訂というのは、日本の学習指導要領の改訂と同間隔でもある。近年その内容は、「祖国への帰国」ではなく「在日を生きる」子どもを前提としているため、日本についての記述も増え、日本社会及び国際社会で生きる子どもたちの将来像に応じた内容となっている。その背景には、保護者の教育要求の反映があり、教科書編纂では日本の教科書も参考にしているという。現在の内容については、朴三石(2012)が詳しいので参照されたい。

ここでは、カリキュラムや教科書が統一されているということが、危機対応に有効性をもった例として、福島県の朝鮮学校と新潟県の朝鮮学校との合同授業をあげたい。2011年3月11日の東北大地震災に端を発した被災地の困難な状況の中で、福島県にある福島朝鮮初中級学校は、地震被害はそれほど大きくなく、一旦4月に学校を再開した。しかし、原発事故による放射能汚染への不安の声が保護者の間に高まったため、何度も協議を重ねた結果ようやく出された結論が、新潟朝鮮初中級学校に学校ごと「避難」して合同授業をおこなうことであった。幸い朝鮮学校によっては寄宿舎があるので、先生と児童生徒全員が宿泊する場所は確保できたという。この「避難」期間中に、学校の除染作業が学校関係者等によっておこなわれたのである。

この話を聞いたときは驚いた。日本の公立学校等でも学校再開がままならないところかなり存在しただろう。今でもなお、他の学校の校舎を間借りしているところもある。子どもや家族が個別に「避難」してしばらく他の学校に通うということもあるだろう。しかし、学校ごと「避難」して合同授業をしたという例はあったのだろうか。阪神淡路大震災の時も含めて調べてみたいと思うが、寡聞にして知らない。もちろん合同授業という方法をとるには、さまざまな制約等があるのかもしれない。しかし、苦渋の決断として実施されたこの事例は、私には「朝鮮学校ならではの可能な方法」と思われたのである。それには、両校が小規模校であり寄宿設備があったということも大きいだろうが、カリキュラムが同一で同じ教科書を使用していたことも有効だったのではないだろうか。

カリキュラムや教科書が統一されていることで、朝鮮学校には中央統一試験もある。毎年1回行われる中央統一試験は、児童生徒の個人の結果だけでなく、学校毎の学力達成の状況を測ることができる。ただし、朝鮮学校の生徒数は数百人のところから一桁のところまであり、学校毎の結果を競ってもあまり意味はないと思われ、この試験についてもその活用法や実施方法については検討がなされているようだ。

スポーツや芸術などの活動が活発な朝鮮学校では、在日朝鮮学生中央体育大会や在日朝鮮学生芸術コンクール、また初級部対象のサッカーの全国大会など、全国の朝鮮学校の児童生徒がその成果をみせ、競う場がある。かつては朝鮮学校が1条校ではないとの理由から、中体連や高体連などの公式試合や各種芸術コンクールに参加が認められていなかった時期があったため、朝鮮学校のみこうした大会等が組織化されてきた。今日では日本の大会にも参加しているが、それでも朝鮮学校だけの大会の持つ意味は大きいという。全国の朝鮮学校が集う機会は、子どもたちに全国に同胞＝仲間がいることを知らせて交流する機会を提供しているからであり、保護者や教員にとっても同様のようだ。

(2) 教員養成と教員研修

朝鮮学校の特徴として興味深いのは、教員養成

を自前でおこなっていることである。朝鮮大学校は、高級学校卒業生の進学先と教員養成、民族幹部の育成という役割に應えるものとして、1956年に創設された。現在、7学部と短期大学部があり、教育学部の中に教育学科（女子対象の3年制と男子対象の4年制がある）と保育科、音楽科、美術科がある。前身の師範教育学部は1964年に創設され、1999年に教育学部と改称された。ただし、教員養成は教育学部に限定されるのではなく、他学部でも教職関連科目を履修して教育実習に行くことによって養成されている。元来朝鮮学校は各種学校であるから教員資格は必要ではない。そうであるにもかかわらず、まるで日本の大学の教職課程のように科目を置き、教育実習まで実施しているのだ。

筆者は、2012年7月に朝鮮大学校を訪問したことがある。東京の西部、小平市の閑静な環境の中にある朝鮮大学校では全員が寮生活を送っている。キャンパス内では、女子学生はやはりチマチョゴリ姿だったが、大阪の黒い制服を見慣れている筆者には、各地域出身の学生の夏服の鮮やかな青色は新鮮に映った。授業や博物館を見学し、先生方や学生たちが集う食堂で昼食をいただいた後、教育学部の何人かの学生と話す機会をもった。

関東や中部、中国地方などさまざまな地域出身の学生たちは、子どもが好きだったから、美術を志望していた、母校の部活を指導したいなど、教員志望者なら日本人とも共通する志望理由を語っていたが、日本の大学生と異なるのは、朝鮮学校の教師になることを通して同胞社会に貢献したいという動機である。めざす教師像も、元気で明るい教師、芯の強い教師、子どもの気持ちをわかってあげられる教師、その他、民族の心を伝えて祖国や同胞社会に貢献したいという学生もいた。また、家族や親族に教員がいる場合も多かったが、教師志望は賛成されるばかりではなく、実は反対されたと語る学生もいた。朝鮮学校の運営が厳しい現状では、給料等の問題もあれば、親自身が経験している職場ゆえに自分の子どもには慎重になるのかもしれない。とはいえ、日本人にとっても教員という職業は、かつては公務員としての身分の安定性等から保護者にとっては喜ばれる職業だったであろうが、最近は教員に対するさまざまな要望

や縛りからその魅力が薄れている。学校を取り巻く状況が異なるので単純化は慎まなければならないが、学生たちとの会話を通して日本の学生との共通性やちがいの一端に触れて興味深かった。

日本にある他の外国人学校では、教員は本国出身者や授業用語ができるなら国籍や出身を問わずに採用している場合が多い。ある中華学校の校長が、教員を探すことが校長の重要な仕事のひとつだと話されていたことがあった。その中華学校の場合、卒業生か留学生が教員の供給源であるため、日本の大学に進学した卒業生を把握しておくことも重要なポイントとなる。卒業生ならば学校の教育活動や学校文化には馴染んでいるが、中学までしかない中華学校の場合、高校から日本の学校に進学していれば中国語の保持伸張という点で課題があろうし、留学生は言葉の上では問題はなくとも学校文化が本国とは同一ではないということもある。しかし、朝鮮学校の場合は、朝鮮学校卒業生を一括して教員に養成し、全国の学校に配属するシステムをもっている。逆に言うと、すべての教育活動を朝鮮語でおこなうために、日本の大学出身者では朝鮮語能力という点で充分でなく、日本との外交関係のない本国から派遣もしくは雇い入れることもできないという独自の事情もある。

教員養成だけでなく、教員の研修という点でも、朝鮮学校の統一システムは注目される。私が訪問していた学校では、毎週校内の研修がおこなわれ、隔週で府下及び近隣の朝鮮学校との合同の研修が初級と中級の別でおこなわれていた。さらに隔年で全国の朝鮮学校が東西に分かれる1日研修と2日間にわたる東京での全国規模の研修が実施されているという。今は高級学校を校区とする研修も加わって、それぞれが3年に一度と改訂されたようだ。研修と称したが、実際には「研究発表」と言われ、教員が自分の実践をもとに論文や研究を発表するようだ。つまり、公立学校教員の研修のように教育委員会主催で講師の話を聞くという受け身の研修ではなく、教職員組合による教育研究集会のような性格のものだろうか。このような機会を通して、他校の情報に触れることができるだけでなく、教員のネットワークが常に更新されている点も朝鮮学校の強みであろう。

教員のネットワークということでは、ある理科

の先生が語られた話が印象的である。日本の子どもたちの「理科離れ、理科嫌い」という話をしていたところ、朝鮮学校にもそういう問題はあったが、「基本的にそれは解決したんですよ」と言われた。聞けば、同様の傾向が朝鮮学校にもあり、理科教員のネットワークを使って全国の朝鮮学校でアンケートを採るなどし、5年間にわたって研究を重ねて理科教育の改善を進めたという。学校数や教員数がそれほど多くなく、しかも教員間に朝鮮大学校での先輩後輩同輩という関係があり、日頃からネットワークが築かれているから可能だったということであろう。

3. 〈朝鮮学校コミュニティ〉の再生産機能と結節点

(1) 朝鮮学校コミュニティという再生産機能

前節で、朝鮮学校の教員は基本的に朝鮮学校の卒業生であり、教員の自前養成ができていることを述べた。では、朝鮮学校の保護者とはいうと、大半が朝鮮学校の卒業生である。たとえば、兵庫県姫路市にある西播朝鮮初中級学校では、保護者の91.3%が同校の卒業生であり、他の朝鮮学校卒業生も加えると98.8%になるという(藪田2013)。これは朝鮮学校でもかなり高い例だとは思われるが、それほど特異な例でもない。すなわち、朝鮮学校の保護者は自身も朝鮮学校の卒業生であり、朝鮮学校の児童生徒は卒業生の親からかなり高い割合で再生産されているということになる。ただし、朝鮮学校の卒業生と言っても高校や大学まですべて朝鮮学校というわけではなく、途中から日本の学校に進学した者もいる。

これを他の外国人学校と比べてみると、たとえばある中華学校では保護者の少なくとも一方が同校の卒業生であるという比率は半分弱だという(館2013)。中華学校や韓国学校では、近年オールドカマーだけでなくニューカマーの家庭や日本人の入学者も多いので、学校によってさまざまであるが、保護者が卒業生である比率は高くならない。ブラジル人学校はまだできて日が浅く、どちらかというと帰国を前提としてきたため、再生産機能はまだ見られないようだ。インターナショナル・スクールも含めた日本の外国人学校の場合は、

元々本国等に将来進路があるために児童生徒が同一学校内で再生産されるものではないと考えられる。そういう中で朝鮮学校の再生産率が高いのは、日本で世代を重ねて生きるという在日コリアンの特質だけでなく、朝鮮学校が朝鮮半島に出自をもつ者に入学を限定しているためである。朝鮮学校では国籍ではなく、ルーツが問われる。国籍で見ると、韓国籍と朝鮮籍が多く、日本国籍その他もある⁵⁾。

朝鮮学校の保護者の学校選択理由は、自身も朝鮮学校卒業生の場合は、「日本人が日本の公立学校に行かせるように当たり前の選択として朝鮮学校にした」「自分がよく知っている安心できる場所だから」というものであった。保護者の中でも朝鮮学校未経験者の場合は、日本の大学などで在日学生のサークルなどに会ったり、在日コリアンにかかわる活動に出会ったというケースが多い。そういう保護者の場合は、自身が民族的アイデンティティの確立に回り道をしたという経験から、そのような回り道をする必要のない環境として、また民族のことばや文化を自然に獲得できる環境として朝鮮学校が選ばれていた(中島2011)。ただし、在日コリアンの子どもの中で朝鮮学校に通うのは全体の1割程度と言われて久しい。朝鮮学校出身者でも朝鮮学校を選ばない保護者もいるので、朝鮮学校を取り巻く状況が厳しいことを考えると、この再生産は現状維持することは難しく縮小傾向にあるといえる。

以上見たように、朝鮮学校では、保護者も子どもも教員も朝鮮学校卒業生という枠の中で再生産されている。こうして形成されたコミュニティを曹(2012)は〈朝鮮学校コミュニティ〉と称している。曹によれば、在日朝鮮人が集住する地域としての在日朝鮮人コミュニティとは別に存在するこの〈朝鮮学校コミュニティ〉は、たとえ居住地域で在日朝鮮人と出会う機会のない者にとっても在日朝鮮人との関係を築ける場所であり、このコミュニティ内では、先輩・後輩を含んだ友人と教員という「朝鮮学校に存在するほとんどの人間と親密な関係を築きうることになり」、「しかも自身の両親の姿を通して、朝鮮学校での親密な関係が卒業後にも継続することを期待」できるという。

すなわち、朝鮮学校では地縁としての地域では

なく、人のネットワークとしてのコミュニティが厳然と存在することを日々感じられるというのだ。大阪のような在日コリアンの集住地ではなくても、朝鮮学校のあるところどこにでも〈朝鮮学校コミュニティ〉が存在し、時にはそのコミュニティは学校毎ではなく朝鮮学校全体のコミュニティともなる。

(2) コミュニティの結節点としての学校

こうした〈朝鮮学校コミュニティ〉の存在を目の当たりにする機会が、朝鮮学校の運動会や芸術発表会等の行事である。ここでは運動会をとりあげる。

地域によっても異なるだろうが、大阪の朝鮮学校では運動会の前夜から保護者が場所取りのために並ぶ。ある学校では、前夜から並んでいたアボジ(父親)たちは、午前8時に開門すると混乱を避けるためか5人ずつ入り、場所を取って一旦家に帰っていた。私が到着した頃にはブルーシートの上に椅子やクーラーボックス、寒い場合の掛け物などが置かれていた。しかし、そのまま残っているアボジたちもいて、ブルーシートの上で寝ていたり話し込んでいたりした。ある女性は、子どもが初級の1年生で、朝の6時頃に来たと言っていた。開始時間が迫ってくると続々と荷物を抱えた保護者や親族がやってくる。お年寄りには椅子を用意し、シートの上にはクッションを並べ、テーブルが置かれているところもある。

大阪の高級学校では、早い人は前日の朝から並んでいたという。フェイスブックで実況中継されていたのかと思う。その夜は雨が降ったので、どうされていたのかと思う。人気が高いのはやはり前の席で、生徒たちの行進等がよく見えるコーナー辺りらしい。運動場の南側には持参のテントが設営されているところもあり、日差しをしのいだり、お年寄りには椅子席を準備しやすいための工夫のようだ。もちろん本部席にはいわゆる敬老席も準備されているが、やはり家族親族一同で観戦したいのだろう。行進や全体演技の多い午後になると、本部席辺りに人が集まってきた。

いよいよ昼食時になると、子どもたちは家族のもとに行き、お弁当を広げて食べている。お弁当という範疇を越えた立派なお重を持参している家

庭も多い。また、一族で3～4軒分のスペースを取ってテーブルを並べ、法事のようにずらりと料理を並べているところもある。もちろんすべてがそういうわけでもない。親子2人で体育館の階段にすわってひっそり食べている家族もいれば、コンビニで買ってきた弁当を囲んでいる家族もいる。屋台が出ていて、飲料やスープ、アイスクャンデーなどが売られていた。保護者会等が担当して売上は教材や備品として学校支援に活用されるようだ。

日本の学校では、今運動会での昼食はどのような形でとっているのだろうか。自治体によっても、また学校によっても異なるようだが、参考に私のゼミの学生に尋ねてみた。大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県出身者である。それによると、大きな傾向としては小学校の運動会は土日におこなわれ、昼食は弁当を家族と食べるか、弁当だが教室で食べていたという。中学や高校になると土日か平日に開催され、弁当を教室で食べている。見に来るのは、小学校では親や祖父母、親戚、きょうだいなどと多いが、中学になると父母程度、高校になると見に来ないという回答が多かった。したがって、当日の朝からの場所取りは小学校ではあるが、中学や高校ではないようだ。この学生たちは全員小学校で教育実習を経験しているので、実習校での現在の運動会の様子を聞くと、彼らの在校時の回答とほぼ同じである。

日本の小学校でもかつては運動会には親が手作りの弁当をもってきてそれを家族で食べるのが通常の光景だったが、いつの頃からか親が来れない子どもへの配慮として、弁当を教室で食べたり、給食にしているところもある。ある小学校では、昼食は運動場で家族とともに弁当を食べるが、登校班で食べるようにして、親が来れない子どももその一団の中に居場所を確保できるようにしているという。そこで、朝鮮学校の校長先生に、朝鮮学校では親が来れない家庭はないのかと尋ねたところ、たいていは親でなくても誰かが来ているが、どうしても誰も来れない家庭もあるらしい。しかし、そういう場合は親同士で子どもを頼んでいたりのるので、それが問題となることはないという。保護者の間の親密さ、ネットワークの強さが子どもや家庭の孤立を防いでいる。この話を日本の小

学校教員にしたところ、日本の学校では親が来れない家庭ほど地域でも孤立している場合が多いと言われていた。この例は別の側面から言えば、朝鮮学校ではすべてを学校が解決すべき問題とはせずに、保護者や地域に委ねてもいるということだ。

また、昼食時のもう一つの光景として注目されたのは、昼食を食べ終わった子どもたちが運動場の隅の遊具で遊んでいるときの、学年やきょうだい関係を越えた子ども同士の様子である。見学した初中級学校では幼稚班も付設しているので、遊具では幼児から中学生までが遊んでいる。見てみると、自然に年下の子どもの安全を気遣い、必要になると手を貸したりしていた。きょうだい関係を越えて、面倒を見合っている。朝鮮学校では人数が少ないこともあって、日常的に年齢を越えたタテのつながりが強いようだが、見知らぬ誰かではなく誰々の弟や妹として拡張した親族のような関係が築かれているように思われた。

このように、日本の学校に比べると、朝鮮学校では運動会は校種や子どもの年齢にかかわらず、家族や親族、卒業生やその他関係者が集う一大イベントであることがわかる。したがって、運動会はいずれの校種においても概ね日曜日に実施される。大阪では初級、中級、高級と別の学校であるため、学校間の日程のバッティングを避けるよう開催日を調整している。ある学校では2012年度は朝鮮人にとってのお盆にあたる「秋夕」と運動会の日程が被ったため、校長先生は各家庭に相談して、開始時間をずらすなど配慮されていた。また種目を見ると、当該学校の児童や生徒だけでなく、家族やきょうだい、別の校種の子どもや教師、地域の青年等が出演するようなプログラムが数々組まれている。また、卒業年次の児童や生徒には、必ず保護者とともに取り組む競技が組まれている。運動会の進行を担当する生徒の実況中継では、生徒の名前だけでなく、「誰のアボジ、オモニ」という紹介が必ずあった。

今年の春に訪れた東北朝鮮初中級学校では、運動会の名称が「同胞学生大運動会」だと聞いた。この名称では、生徒の前にまず「同胞」が来ている。というのも、学校単独では開催できる規模ではないので、毎年「創立〇周年記念」として卒業生もすべて含むこのような方法にしたという。今

年は、児童生徒が21人のところに、保護者を含む同胞たちが200人集まったらしい。午前中に競技を終え、午後は運動場から一段上がったところで朝鮮学校恒例の七輪焼き肉がおこなわれたとのことだ。ちなみに、「朝鮮学校の運動会は家族に限らず多くの同胞もつどい、昼食は必ず焼き肉らしい」と以前から聞いていたので、ある時神奈川の朝鮮学校の先生に尋ねると、「それは大阪の話で神奈川や東京では焼き肉はしない」と言われた。しかし、その年の秋、初めて大阪の運動会を2校で見た時に焼き肉はなかった。聞けば、確にかつては七輪焼き肉をやっていたらしいが、火の管理の問題などから現在はおこなわれていないという。しかし、大阪では公開授業の後の交流会等の行事で焼き肉というのはよく見られる光景だ。オモニたちが調理場で調理している間に、アボジたちが校庭の片隅で七輪の火を起こしている光景と、その後の焼き肉を囲みながらの交流会は、私には〈朝鮮学校コミュニティ〉の一つの鮮明な映像である。

4. 朝鮮学校の二つの仕組みの意味—日本社会との関係を問う

以上で見たように、全国の朝鮮学校は自前でカリキュラムを作り、教科書を編纂し、学校を運営し、教員を養成し、教員も児童生徒も相互に交流し啓発を図る自前のシステムを有している。このシステムの完成度は高く、自前ですべてまかなえるようになっている。言ってみれば、日本社会の中に、日本の公教育制度とは別の制度がパラレルに存在しているかのようだ。そしてそれは、日本の教育制度とかなり似ており、その代替物として組織化され発展してきたことは確かである。

私は〈自己完結統一システム〉と名付けたが、宋(2012)は、「自立型教育組織」とし、「朝鮮学校だけの特殊な民族教育が可能な理由」が、「日本の公教育から分離された閉鎖的自治空間としての『ウリハッキョ(私たちの学校)』の存在にあった」としている(p.114)。宋によれば、このような分離主義的教育空間は、朝鮮半島の植民地支配からの解放後の日本における歴史的経緯の中で、日本政府・占領軍と日本共産党という「左派と右派両

側における」「日本の民族主義に基づいた人種主義と北朝鮮の民族主義に基づいた社会主義の『意図せざる合作』」だという(p.116)。しかし宋は、この「合作」という用語は在日コリアンの主体性を否定する立場から用いているのではなく、「在日朝鮮人の運動と民族教育が、人種主義による排除と弾圧によって追い込まれるなかで、朝鮮民主主義人民共和国という国家主義と出会い、意図せざる結果として総連と朝鮮学校が成立したとみるべき」だとする(p.203)。

確かに、1955年の総連の結成以降在日朝鮮人を祖国の在外公民と位置づけ、1957年からは毎年共和国から教育援助金を送られたことや、日本政府に対しては内政不干渉という立場をとったことから、日本の公教育とは分離した学校体系を作り運営してきたという側面はその通りだろう。その背景には、戦後直後からの在日朝鮮人による民族教育の営みがことごとく弾圧の対象となり、日本政府当局は朝鮮学校を日本の私立学校として認めないばかりか、公立学校化した一時期の経験を新しい学校制度構想へと活かそうとはせず、公教育の外へ排除したという厳しい経緯がある。

しかし、「朝鮮学校だけの特殊な民族教育」が分離主義的教育空間を形成したからこそ可能だったとする表現には、少し検討の余地があるように思える。まず、言葉尻をとらえるようだが、民族教育に特殊も普遍もあるのだろうかとの疑問があり、「日本の学校」も日本国民＝日本民族への民族教育を目的としていることは、言わずもがなであろう。しかし、たぶんここではそういうのではなく、例えば他の民族系学校がおこなう民族教育等と比べても「特殊」だというならそれは、植民地支配下においてその民族性が否定された経験をもつ民族が、旧宗主国において脱植民地化の教育的営為としておこなう民族教育という意味で、「特殊」なのであろう。そして、その教育をおこなうためには、この民族教育を否定する日本の教育とは分離した形でしか存続させることはできない。にもかかわらず、その有り様は日本の教育制度や教育内容等と全く切り離れた形ではありえず、それを参照し、時にはその変容に合わせて形成されてきたという側面もまたあるのだ。

すなわち、このシステムはかれらが選んだわけ

でも、強いられただけでもないということだ。日本社会との関係で考えるならば、それは密接な関係性の中で成立してきている。しかし、その関係性はかなり非対称なものである。片方にとっては、日本社会との関係なしにはありえず、距離を保って「平和的共存」をしようとしても時には「攻撃」を受け、日本の教育は時には参照すべき対象であり、日本社会は「外の目」としてその評価が気になる相手でもある⁶⁾。ところが、もう片方は通常はこの関係性に無頓着だったり、忘れたりしている。冒頭で述べた、近年の朝鮮学校が日本社会に門戸を開いているということも、そうせざるをえない状況に追い込まれているという側面からも見る必要があろう。それに対して、日本社会の側が朝鮮学校に対して「開く」とときには、高体連等への参加にしろ大学受験資格にしろ対等な権利ではなく常にわずかの格差を設け、時にはいつでも遮断する⁷⁾。この非対称な関係性とはあきらかな権力関係であり、いまなお継続する植民地的関係である。

それでは、朝鮮学校が〈自己完結統一システム〉を作り上げ維持してきたのは何のためだろうか。それは、「特殊な民族教育」をおこなうためではなく、すでに見てきたように子どもたちが安心して存在できる空間を確保して、民族教育も当然前提とした教育＝「普通教育」をおこなうためであると考え。朝鮮学校では「普通教育」がおこなわれている、という単純な事実にもっと目を向けるべきだ⁸⁾。専門教育でも職業教育でもなく、幅広い教科教育や学校行事、特別活動を通して人間形成を図るのが普通教育である。それを朝鮮語によっておこなうという方法を選んだのは、そうではなくては日本社会にあって朝鮮語と在日朝鮮人であるというアイデンティティを日常的に獲得し維持することは不可能だからだ。

そして、このシステムを稼働し継続していくためには、朝鮮学校にかかわるすべての人びとの支援と協力なしには困難である。〈朝鮮学校コミュニティ〉がそれを担っているのである。朝鮮学校では、「一世が作り二世が守ってきた学校を私たち三世四世が受け継ぐ」という言葉がよく語られる。学校を語るこのストーリーが、〈朝鮮学校コミュニティ〉を支えている。しかし、学校を支え

るために〈朝鮮学校コミュニティ〉があるという表現は正確ではないだろう。日本の教育で近年しばしば「学校と地域や家庭との連携」が強調されているが、そこには地域や家庭の教育力が低下しているために学校が働きかけるとか、逆に学校の諸問題は学校だけで解決できるものではなく、地域や家庭との協力関係が必要だとする意味合いがある。しかし、朝鮮学校では学校、地域、家庭がそのように分断されていないように感じる。ある人は、「朝鮮学校には、地域の同胞と直につながっているという感覚以上の実体、つまりコミュニティがあります。常に地域が学校の中に流れ込んでいるのが朝鮮学校です」と語っている（朴敦史2012）。地域と学校との境界を厳密に引けるものではないということだろう。学校の中に地域や家庭が、そして地域や家庭の中にも学校が当然のように「流れ込んでいる」、そうした日常を生きるのが〈朝鮮学校コミュニティ〉に「住もう」人々なのである。とはいえ、人々は〈朝鮮学校コミュニティ〉にのみ「居住」しているのではない。朝鮮学校出身者は日本社会の中で広く活躍している。そのウイングが広がれば広がるほど、コミュニティの力が弱まるのではなく、何かあるときの支えとして強まっている。それが、阪神淡路大震災や東日本大震災時に、また高校無償化や補助金廃止等の問題が生じたときなどに発揮されている。特に最近ではブログやSNSなどの通信手段を活用して〈朝鮮学校コミュニティ〉の情報発信や共有がなされているので、全国に散らばり日常的には顔を合わすことはなくてもその凝集性は高まっているようだ。ただし、その凝集性が閉鎖的な性格を持つことがあれば、外部との遮断や内部での排除につながりかねないこともある。

以上見てきたように、〈自己完結統一システム〉と〈朝鮮学校コミュニティ〉という朝鮮学校の特有の仕組みは、日朝関係を含む国際関係や外交関係、日本の政治状況や経済状況、また在日社会における少子化や国際結婚の増加などの社会的な変化や教育観の多様化等によって常に挑戦されている。特に、日本政府や各自治体による近年の政治的経済的措置は、朝鮮学校の小規模化や統合をさらに促すことにもなり、これまで培ってきたものを見直す必要性も出てくるかも知れない。しか

し、それを日本の社会や日本の教育と断絶したものとして見なすまなざしこそが問われていることは不十分ながら述べた。日本社会を朝鮮学校との関係から問い直すこと、日本の教育を朝鮮学校の経験からみることとは具体的にどのようにすることなのかまでは筆者の力量不足で叶わなかったが、今後の課題としたい。

註

- 1) 2012年2月25日に開かれた〈日朝教育交流のつどい〉(於：東京第二朝鮮初級学校)での挨拶。
- 2) 筆者たちは約1年間にわたって大阪と兵庫の朝鮮学校を調査したことがある。うち1名は毎月1回のフィールドワークをおこなった。他の2名は公開授業や学校行事等に参加し、教職員や保護者へのインタビューをおこなった。その成果は、大阪大学未来戦略機構第五部門(2013)参照のこと。また、愛知県でも同様な調査がおこなわれている(山本2013)。なお、歴史的に見るならば、1960~70年代頃は日本の教育学者でも取り組んでいるものはいた。とりわけ代表的なものとして、日本教育学会教育制度研究委員会の外国人学校制度研究小委員会による『「在日朝鮮人とその教育」資料集』第一集(1970)、第二集(1972)を挙げることができる。ただ、フィールドワーク的な方法がとられるようになったのは近年のことである。ただし、こうした方法では朝鮮語が欠かせないために、日本人研究者の方にその準備ができていないことも指摘しなければならない。そういう意味では、朝鮮学校出身者による最近の活発な朝鮮学校研究は注目される。
- 3) 2010年3月段階で214校とされているが(田中2011)、ブラジル人学校の閉鎖等からやや減少していると推測される。
- 4) 韓国学校のうち3校は日本の私立学校に認定されているので、民族教科以外は当然検定教科書を使用している。
- 5) 日本在住の朝鮮半島出身者およびその子孫の呼称には、在日朝鮮人、在日韓国人、在日韓国・朝鮮人、在日コリアン等、様々なものがある。本稿においては文脈に応じて在日コリアンと在日朝鮮人の双方を用いているが、差し当たりそれが国籍や南北いずれかの体制支持如何と関わるものではないことを断わっておきたい。
- 6) 朝鮮学校の関係者と話していると、よく「外の目」と言われることがある。私のような日本人研究者が朝鮮学校に入ったりその成果を発表することに対して、「外の目からはどのように見えるのか知りたい」と

言われる。日本社会の評価に関心があるだけでなく、そこから内部の改革へと繋げたいという思いを感じることもある。

- 7) 朝鮮学校は中体連や高体連には現在参加はできるが、加盟が認められている訳ではない。国立大学の受験資格も、他の外国人学校とは異なって個人審査という形態で認められているにすぎない。高校無償化に至っては、当初は対象とするとされたのが、結局要件の変更によって排除された。
- 8) 朝鮮学校でおこなっている教育は「普通教育」であるとは、教育行政学者の故岡村達雄先生(元関西大学教員)に教えていただいた。その場に同席していた佐野通夫氏がのちに佐野(2006)においてその論を展開されている。

参考文献

- 大阪大学未来戦略機構第五部門(2013)『「外国人学校」の社会学—「往還する人々」の教育戦略を軸に—』(未来共生リーディングスVol.1)。
- 小沢有作(1973)『在日朝鮮人教育論—歴史篇—』亜紀書房。
- 呉永鎬(2011)「朝鮮学校教育の『日常』からの性格検討—1950年代後半における朝鮮学校教員に求められた『教員性』の分析から—」在日朝鮮人運動史研究会編『在日朝鮮人史研究』第41号。
- 呉永鎬(2012)「朝鮮学校の教育の成立過程に関する教育学的研究—その理念、内容、場の検討から—」『〈教育と社会〉研究』第22号。
- 月刊『イオ』編集部(2006)『日本の中の外国人学校』明石書店。
- 佐野通夫(2006)「日本国憲法下の民族教育」枝川裁判支援連絡会編『とりあげないでわたしの学校—枝川朝鮮学校裁判の記録(第一集)—』樹花舎。
- 志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛治致・ハヤシザキカズヒコ編(2013)『「往還する人々」の教育戦略—グローバル社会を生きる家族と公教育の課題—』明石書店。
- 宋基燦(2012)『「語られないもの」としての朝鮮学校—在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス—』岩波書店。
- 館奈保子(2013)「中華学校を選択した華僑保護者の教育戦略」志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛治致・ハヤシザキカズヒコ編(2013)所収。
- 田中宏(2011)「外国人の教育への権利—外国人学校の現状を中心に—」財団法人アジア・太平洋人権情報センター編『外国にルーツをもつ子どもたち—思い・制度・展望—』現代人文社。
- 曹慶鎬(2012)「在日朝鮮人コミュニティにおける朝鮮学校の役割についての考察—朝鮮学校在学生を対象とし

- たインタビュー調査を通じて―』『移民政策研究』第4号。
- 中島智子 (2011) 「朝鮮学校保護者の学校選択理由―『安心できる居場所』『当たり前』をもとめて―』『プール学院大学研究紀要』第51号。
- 朴三石 (2008) 『外国人学校―インターナショナル・スクールから民族学校まで―』中央公論新社。
- 朴三石 (2012) 『知っていますか、朝鮮学校』岩波書店。
- 朴敦史 (2012) 「災害に強い朝鮮学校」教育の境界研究会『教育解放』第8期第23号。
- 韓東賢 (2005) 「メディアの中の『在日』と『朝鮮学校』、そのリアリティのありか」『世界』2005年4月号。
- 韓東賢 (2006) 『チマ・チョゴリ制服の民族誌―その誕生と朝鮮学校の女性たち―』双風舎。
- 福田誠治・末藤美津子編 (2005) 『世界の外国人学校』東信社。
- 藪田直子 (2013) 「西播朝鮮初中級学校」大阪大学未来戦略機構第五部門 (2013) 所収。
- 山本かほり (2013) 「朝鮮学校で学ぶということ―朝鮮学校の処遇と現状―」移民政策学会2013年度年次大会シンポジウムでの発表。